

# 津田梅子記念会 & ホームカミングデー

---

---

津田塾大学

120周年記念式典、記念シンポジウム

日時 | 2021年10月10日(日) 10:00～

会場 | 津田塾大学小平キャンパス新館 特別教室



# 津田塾の歴史

## 塾創立まで 1864～1900年

- 1864(元治元) 津田梅子、江戸牛込南町(現在の新宿区)に生まれる
- 1871(明治4) 梅子、北海道開拓使派遣の5人の女子留学生の一人として、欧米視察の岩倉具視大使一行とともに米国に出発
- 1882(明治15) 梅子、アーチャー・インスティテュート卒業 山川捨松とともに帰国の途につく
- 1886(明治19) 梅子、華族女学校教授となる
- 1889(明治22) 梅子、プリンマー大学へ留学(92年に帰国)
- 1898(明治31) 梅子、女子高等師範学校教授を兼任
- 1900(明治33) 女子英学塾、麴町区一番町(現在の千代田区)に10名の入学者で開校

## 塾発展期 激動の時代の中で 1901～1945年

- 1905(明治38) 女子の学校として初めて英語科教員無試験検定を認可される
- 1922(大正11) 東京府下北多摩郡小平村(現在の小平市)に学校用地を取得
- 1923(大正12) 関東大震災で五番町(現在の千代田区)の校舎が全焼
- 1924(大正13) 1月、仮校舎で授業を再開
- 1929(昭和4) 8月16日、梅子死去(享年64歳) 星野あい、塾長となる
- 1931(昭和6) 東京府北多摩郡小平村(現在の小平市)の新校舎に移転、授業開始(塾生352人)
- 1933(昭和8) 創立者津田梅子を記念し、「女子英学塾」から「津田英学塾」と改称
- 1943(昭和18) 理科新設認可 「津田英学塾」から「津田塾専門学校」と改称

## 充実期 次代への鼓動 1946～2000年

- 1948(昭和23) 「津田塾大学」設立 英文学部を設置
- 1949(昭和24) 数学科設置 英文学科、数学科をもつ学芸学部となる(在学生442人)
- 1960(昭和35) 語学研究所(後に言語文化研究所と改称)を設置  
国内の大学として初めてランゲージラボラトリーを設置
- 1963(昭和38) 大学院設置(文学研究科、理学研究科)
- 1969(昭和44) 国内の私立大学では初となる国際関係学科を設置(在学生1,332人)
- 1974(昭和49) 大学院国際関係学研究科を設置
- 1975(昭和50) 国際関係研究所を設置
- 1988(昭和63) 数学・計算機科学研究所を設置
- 1990(平成2) 5号館(視聴覚センター棟)落成
- 1996(平成8) 数学科を情報数理科学科と改称  
1号館(英文学科・国際関係学科学研究棟)落成
- 2000(平成12) 創立100周年を迎える(在学生2,763人)  
私立の女子高等教育の創始100周年記念「切手発行(11月22日)  
津田梅子記念交流館落成

## さらなる飛躍を目指して 2001～

- 2001(平成13) 本館校舎(ハーツホン・ホール)東京都選定歴史的建造物に指定  
軽井沢セミナーハウス落成
- 2003(平成15) 多文化・国際協力コースを開設
- 2005(平成17) 英文学科に副専攻「翻訳コース」、「通訳コース」を開設
- 2006(平成18) 情報数理科学科を改組し、数学科、情報科学科を開設  
メディアスタディーズ・コースを開設
- 2008(平成20) 渋谷区千駄ヶ谷に新キャンパスを開設
- 2017(平成29) 千駄ヶ谷キャンパスに総合政策学部を設置
- 2019(平成31) 学芸学部が多文化・国際協力学科を設置、英文学科を英語英文学科と改称
- 2020(令和2) 創立120周年を迎える

## Page

- |   |                      |    |  |
|---|----------------------|----|--|
| 1 | スケジュール・開催行事          | 10 | 創立120周年記念シンポジウム<br>「変革を担う、女性であること」           |
| 2 | 津田梅子記念礼拝             | 12 | <多文化・国際協力コース><br>ラウンドテーブルシンポジウム              |
| 3 | 創立120周年記念式典次第        | 13 | <交流館自主フォーラム企画><br>「Let's 国際交流—ゲストの国はどんなところ？」 |
| 4 | Alma Mater           |    |  |
| 5 | 津田梅子賞贈賞式             |    |  |
| 6 | 第21回高校生エッセー・コンテスト表彰式 |    |  |

- ◆ 津田梅子記念礼拝 …………… 10 : 00 ~ 10 : 45  
 奨励 湊 晶子 氏 (広島女学院顧問、元東京女子大学学長)
  
- ◆ 創立 120 周年記念式典次第 …………… 10 : 45 ~ 11 : 55  
 挨拶 理事長 島田 精一  
 祝辞 日本私立大学連盟会長 田中 愛治 氏 (早稲田大学総長)  
 祝辞 津田塾大学同窓会会長 飯野 正子 氏  
 挨拶 学 長 高橋 裕子  
 記念事業報告 創立 120 周年記念事業委員会副委員長  
                   小島 敬裕 (副学長 (総務・財務担当))  
 Alma Mater 斉唱
  
- ◆ 津田梅子賞贈賞式 …………… 11 : 55 ~ 12 : 10
  
- ◆ 高校生エッセー・コンテスト表彰式 …… 12 : 10 ~ 12 : 25  
 テーマ : 「生きがい」とは? 逆境を光につないだ神谷美恵子の言葉から
  
- ◆ 記念シンポジウム …………… 13 : 30 ~ 15 : 15  
 「変革を担う、女性であること—津田塾大学と Bryn Mawr College の絆を  
 通して考える 21 世紀における女子大学の意義—」  
 ・ビデオメッセージ  
   Kimberly Wright Cassidy 氏 (プリンマー大学学長)  
   Emily Murase 氏 (元サンフランシスコ女性地位推進局局長)  
   and Kenji G. Taguma 氏 (日米ウィークリー編集長)  
 ・鼎談  
   飯野 正子氏 (津田塾大学同窓会会長)  
   高橋 裕子 (学長)  
   野口 啓子 (学芸学部英語英文学学科教授)

司 会： 中野 美由紀（学芸学部情報科学科教授）

奏 楽： 吉朝 加奈（東邦大学講師、津田塾大学非常勤講師、国大24）

前 奏

○ 讃 美 歌 讃美歌 312番 「いつくしみ深き」

聖 書 ローマの信徒への手紙 5章1～5節（新共同訳聖書）

祈 禱 須田 愛結（TCF・学芸学部英語英文学科4年）

○ 讃 美 歌 讃美歌 217番 「あまつましみず」

奨 励 「『ぶれない個・私・人格』に」

湊 晶子 氏（広島女学院顧問、元東京女子大学学長）

祈 禱 （湊氏）

○ 讃 美 歌 讃美歌 494番 「わが行くみち いついかに」

主 の 祈 り

○ 頌 栄 讃美歌 542番 「世をこぞりて」

黙 禱

後 奏

○印は、ご起立ください。体調のすぐれない方はお座りいただいたままでもかまいません。

開式の辞

- |        |   |                  |
|--------|---|------------------|
| 挨拶     | 理事長                                       | 島田 精一            |
| 祝辞     | 日本私立大学連盟会長                                | 田中 愛治 氏（早稲田大学総長） |
| 祝辞     | 津田塾大学同窓会会長                                | 飯野 正子 氏          |
| 挨拶     | 学 長                                       | 高橋 裕子            |
| 記念事業報告 | 創立120周年記念事業委員会副委員長<br>小島 敬裕（副学長（総務・財務担当）） |                  |

Alma Mater 斉唱（歌唱はせず録音音源を流します）

閉式の辞

# Alma Mater

作詞 A. C. Hartshorne

♩ = 60


Piano



Musical notation for the piano introduction, consisting of two staves (treble and bass clef) in 6/8 time, with a key signature of two flats (B-flat and E-flat).

5

1. O, Al - ma Ma - ter, Mo - ther dear With songs thy name we  
2. What though the hills be steep and high, The path be rough and



Musical notation for measures 5-7, including two lines of lyrics. The piano accompaniment continues in the bass clef.

8

greet long, Who dost the Gate of Know - ledge here Set  
From toil - some days comes rest more sweet, And



Musical notation for measures 8-10, including lyrics. The piano accompaniment continues in the bass clef.

11

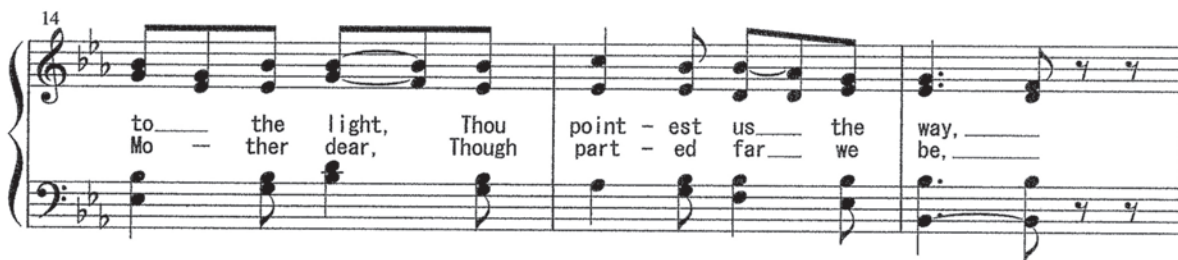
o - pen for our feet Thou turn' st our fa - ces  
heart and hand more strong. Then, Al - ma Ma - ter,



Musical notation for measures 11-13, including lyrics. The piano accompaniment continues in the bass clef.

14

to the light, Thou point - est us the way,  
Mo - ther dear, Though part - ed far we be,



Musical notation for measures 14-16, including lyrics. The piano accompaniment continues in the bass clef.

17

The great of old, the wise and true Have trod - den in their day.  
Thy name shall still our bo - soms thrill With pride and loy - al - ty.



Musical notation for measures 17-19, including lyrics. The piano accompaniment continues in the bass clef.

1900年、津田梅子は女子英学塾（現：津田塾大学）を創立し、高い専門性と広い教養を身に付け、男性と対等に協同しうる力量をもったオールラウンドな女性の育成を目指しました。明治日本の保守的な壁を目の前にしながらも、勇気・情熱・志をもって、私塾の創設、経営という先駆的な企図に挑戦し、その後の女性の社会参画に大きく貢献しました。

それから1世紀余りが経ち、さまざまな分野で女性が活躍する時代になりました。同時に、現代には津田梅子が生きた時代とは異なる困難が、グローバルに、そしてローカルに顕われています。この複雑化する現代社会において、津田梅子であれば何に取り組み、そして何に挑戦しているのでしょうか。

2010年、津田塾大学創立110周年を記念して創設した「津田梅子賞」も、今年で11回目を迎えました。本賞は、津田梅子のパイオニア精神にちなみ、女性の未来を拓く可能性への挑戦を顕彰することを目的とします。

<選考対象>以下の1.または2.に該当する個人／団体で、現代社会に顕著な影響を与えた方

1. 女性の可能性を広げる取り組みを行う個人または団体・組織（性別を問いません）
2. さまざまな分野で先駆的な活動を展開した女性

2021年度は選考の結果、次の方に決定いたしました。

樋口 恵子 氏（NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長、東京家政大学名誉教授）

## 受賞者紹介

### 樋口 恵子（ひぐち けいこ）氏

1932年、東京都生まれ。1956年、東京大学文学部美学美術史学科卒業。東京大学新聞研究所本科修了後、時事通信社、学習研究社、キヤノン株式会社での勤務を経て、フリーの評論家として現在に至るまで評論活動を展開。1986年から2003年まで東京家政大学教授、2014年から2020年まで同大学女性未来研究所所長を務め、現在は、NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長、東京家政大学名誉教授・同大学女性未来研究所名誉所長、高齢社会NGO連携協議会代表（共同代表）。

著書に、『老いの福袋 あっぱれ! ころばぬ先の知恵88』（中央公論新社、2021年）、『老一い、どん！—あなたにも「ヨタヘロ期」がやってくる』（婦人之友社、2019年）、『サザエさんからいじわるばあさんへ 女・子どもの生活史』（朝日文庫、2016年）他。広く女性、更には男性に向けて情報を発信し、男女の生き方に関する問題提起を行ってきた。定年後、妻にまわりつく夫を「濡れ落ち葉」と表現し、1989年の新語・流行語大賞の表現賞を受賞する等、社会への発信力が傑出している。

また、樋口氏は「評論家」という肩書では収まり切れない活動を行ってきた。その一例が1983年に仲間と結成したNPO法人「高齢社会をよくする女性の会」で、現在も理事長を務めている。21世紀に訪れる超高齢化社会を見通して、平均寿命が長い女性たちが「女性の視点」を踏まえ発言し行動していくことの重要性を訴え、趣旨としてきた組織である。1983年と言えば、働く女性の差別撤廃を目指す男女雇用機会均等法の制定（1985年）論議が激しかった時代だが、樋口氏は労働分野にとどまらず女性全体の地位向上や男女間格差の是正等の問題提起を続けてきた。

このように高齢社会の到来を見据え、さまざまな視点からの情報発信、政府への提言などを行ってきた樋口氏の業績は、先駆的な活動を展開した女性を顕彰する津田梅子賞に相応しいと言える。



「津田梅子賞選考委員会」選考委員（50音順）

有馬 真喜子（ジャーナリスト、認定NPO法人国連ウィメン日本協会理事長）

大類 久恵（津田塾大学津田梅子資料室長）

鹿嶋 敬（一般財団法人女性労働協会顧問）

金城 清子（元龍谷大学法科大学院教授）

小館 亮之（津田塾大学副学長）

高橋 裕子（津田塾大学学長）

# 高校生 エッセー・ コンテスト

Since 2000

高校生エッセー・コンテストは、津田塾大学創立 100周年を記念して、2000年から始まりました。日本語、英語、どちらでも応募できるのが特色です。これまで、ある人物に手紙を書くという形式でしたが、2021年は神谷美恵子が残した言葉を手がかりに、「生きがい」について考え、書く形式にしました。第 1 回から 21 回までの応募総数は 8709 編。海外からも作品が寄せられています。

津田塾大学が「書く力」を重視するのは、津田梅子が本学の前身「女子英学塾」を創設した頃からの伝統です。テーマを深く掘り下げ、自分の言葉で的確に表現することは、考える力、生きる力にもつながります。津田塾大学は高校生のみ皆さんの「書く力」を応援しています。



スティーブ・ジョブズ  
第 18 回 2017 年度



ローザ・パークス  
第 14 回 2013 年度



エマ・ワトソン  
第 17 回 2016 年度



キング牧師  
第 2 回 2001 年度



マズーン・メレハン  
第 20 回 2019 年度



ジョン・レノン  
第 3 回 2002 年度



デイヴィッド・ソロー  
第 5 回 2004 年度



ネルソン・マンデラ  
第 19 回 2018 年度



サンテグジュベリ  
第 8 回 2007 年度



津田梅子  
第 11 回 2010 年度



チャールズ・チャップリン  
第 7 回 2006 年度



レイチェル・カーソン  
第 4 回 2003 年度



津田梅子  
第 12 回 2011 年度



オードリー・ヘップバーン  
第 6 回 2005 年度



津田梅子  
第 15 回 2014 年度



津田梅子  
第 1 回 2000 年度



100人の村(村人)  
第 10 回 2009 年度



アル・ゴア  
第 9 回 2008 年度



ヴァイツゼッカー  
第 16 回 2015 年度



津田梅子  
第 13 回 2012 年度



# 「生きがい」とは？

## 募集要項

### 【募集内容】

裏面の文章を読んで、「生きがい」についてあなたが考えたことをエッセーにしてください。英語の場合は400words程度、日本語の場合は1,200字程度で記述してください。

### 【応募資格】

高校生(国籍・学年・性別・居住地は問いません)。

### 【応募方法】

所定のGoogleフォームにエッセーを記載して応募してください。(郵送・持ち込み不可)。

Googleフォーム

<https://qr.paps.jp/HSLpz>



※Googleフォームは下書き保存ができません。Wordファイル等に下書きを作成してから所定のGoogleフォームにコピー・アンド・ペーストしてください。

### 【募集期間】

2021年8月2日(月)~9月6日(月)9:00受付締め切り

### 【表彰】

最優秀賞1名(賞状及び副賞5万円を贈呈)  
優秀賞若干名(賞状及び副賞1万円を贈呈)  
最優秀作品は、10月10日(日)津田塾大学において表彰し、津田塾大学広報誌「Tsuda Today」と津田塾大学ウェブサイトに掲載・公表します。優秀作品は津田塾大学ウェブサイトに掲載・公表します。また、入賞者には10月8日(金)までに本人に通知します。なお、応募作品の著作権はすべて津田塾大学に帰属します。新型コロナウイルス感染拡大状況に鑑み、表彰をオンラインで実施する場合があります。

### 【問い合わせ】

津田塾大学ライティングセンター 高校生エッセー・コンテスト事務局  
TEL:042-342-5129 E-mail:essaycon@tsuda.ac.jp

<https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/essay/index.html>

## 逆境を光につないだ 神谷美恵子の言葉から

津田塾大学は、津田梅子の「女子英学塾」創設から120年にわたり、「変革を担う」女性たちを輩出してきました。精神科医として、ハンセン病の逆境にある人たちに寄り添い続けた神谷美恵子(1914-1979)もその一人です。著書『生きがいについて』(みすず書房)は、出版から半世紀以上たった今も人々の心をとらえ続け、コロナ禍で再びその意義が見直されています。

今回のエッセー・コンテストでは、神谷美恵子が残した言葉を手がかりに、高校生のみなさんに「生きがい」について考えたことをエッセーという形で書いていただきます。

個人情報は、本コンテストの目的以外には使用いたしません。  
<https://www.tsuda.ac.jp/privacypolicy.html>



## 「生きがい」とは？

神谷美恵子は津田英学塾(現津田塾大学)で英文学を専攻しましたが、卒業後まもなく肺結核にかかり、孤独な療養生活を通して人生への思索を深めました。

「当時は結核のいい療法もなかったので、同時代に療養していた知人のなかには、いくたりも若くして逝いたひとがあった。その後私はふしぎにも完全に治ったが、いったいなぜ私だけが癒されて、あのひとたちは死んで行ったのであろうか、という思いが負い目のようになって、いつまでも心につきまどった。大体以上のようなことから、病や苦しみ、死や生の問題は早くから私をとらえてはなさなかった、といえる。

らい(原文ママ:ハンセン病)の存在をはじめて知ったのは、津田英学塾二年生のときであった。キリスト教の伝道者であった叔父にさそわれて東京都の多磨全生園をおとずれ、この病気の患者さんたちに初めて接して大きなショックをうけた。私もできれば看護婦か医師になってこのひとたちのために働きたい、という思いが心に芽ばえたのもこの時である。しかし、周囲の大反対と自らの病気のため、この願いはなかなか実現されなかった。」

(『生きがいについて』より)

精神科医として歩み始めたのは30歳になってからのことでした。2人の子どもを育てながら、当時、差別や偏見の対象であったハンセン病の人たちに寄り添い、多くの翻訳や著作を世に送った神谷美恵子は、まさに「生きがい」をたえず自らに問いながら歩み続けた、変革を担う女性であったと言えるでしょう。

神谷美恵子が全書をこめたエッセー『生きがいについて』の冒頭には、こう記されています。

「平穩無事なくらしにめぐまれている者にとっては思い浮かべることささむつかしいかも知れないが、世のなかには、毎朝目がさめるとその目ざめるということがおそろしくてたまらないひとがあちこちにいる。ああ今日もまた一日を生きて行かなければならないのだという考えに打ちのめされ、起き出す力も出て来ないひとたちである。耐えがたい苦しみや悲しみ、身の切られるような孤独とさびしさ、はてしもない虚無と倦怠。そうしたもののなかで、どうして生きて行かなければならないのだろうか、なんのために、と彼らはいくたびも自問せずにいられない。たとえば治りにくい病気にかかっているひと、最愛の者をうしなったひと、自分のすべてを賭けた仕事や理想に挫折したひと、罪を犯した自分をもてあましているひと、ひとり人生の裏通りを歩いているようなひとなど。

いったい私たちの毎日の生活を生きるかいあるように感じさせているものは何であろうか。ひとたび生きがいをうしなったら、どんなふうにしてまた新しい生きがいを見いだすのだろうか。」

神谷美恵子は、「耐えがたい苦しみや悲しみ、身の切られるような孤独とさびしさ、はてしもない虚無と倦怠」というような、いわば逆境の中から、「生きがい」という言葉を見つめなおしています。これは、「病めるひとたちの問題は人間みんなの問題」だと考え、「このひとたちひとりひとりとともに、たえずあらたに光を求めつづける」一貫した姿勢によるものでしょう。逆境から光への道しるべが、そこから見えてきます。

精神医学の英語論文では、神谷は究極の逆境を“limit-situation”(限界状況)という専門的な視点から考察しています。

Among various situations that may confront human beings during the courses of their lives, there are certain extreme adversities that by their very nature cannot be avoided, manipulated or changed; they stand in front of man like stern walls, deaf to all entreaties or endeavours, so that man's powers of endurance are tried to the limit and usually to no avail. (中略) How does a man, who is placed in such a limit-situation, react to it and in what form does he surmount it, if he ever does? That is a basic question related to his very existence as a man. (“The Existence of a Man Placed in a Limit-situation,” *Confin. psychiat.* 6, 1963.)

今、わたしたちは、世界を不安の渦に巻き込んだ新型コロナウイルス感染症拡大の現実に向き合っています。コロナ禍で世界が大きく変わるなか、地球上の多くの人々が、これまでとは全く違う、厳しい状況下に置かれました。命や健康、経済が脅かされ、人と人のつながりや、行き来も厳しく制限されました。みなさんのなかには、不自由を我慢したり、孤独におしつぶされそうになったり、また、楽しみにしていた旅や学びの機会、そして夢まで諦めなくてはならない人もいるでしょう。そのようななかで、自分の生き方や考え方、「生きがい」を見つめ直しているかもしれません。

そびえたつ壁のように立ちはだかる困難を、人はどう乗り越え、自身の存在意義を見出せるのでしょうか。自分自身の経験や学びなどをもとに、あなたが考えることを自由に書いてみてください。英語でも日本語でもかまいません。

募集要項および応募方法の詳細については津田塾大学WEBサイトをご覧ください。  
<https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/essay/index.html>



# 変革を担う、女性であること

— 津田塾大学と Bryn Mawr College の絆を通して考える 21 世紀における女子大学の意義 —

津田梅子が二度目の留学（1889—1892）で Bryn Mawr College に学んだことをきっかけに、津田塾大学と Bryn Mawr College はその絆を深めてきました。本シンポジウムでは、津田塾大学創立 120 周年を記念し、日本・アメリカにおいて高等教育を通して女性リーダーを輩出してきた両校の歴史を振り返りながら、変革期の社会を見据え、女子大学の意義について考えていきます。さらに、津田塾大学と Bryn Mawr College に関係する女性リーダー達を迎え、女子大学のさらなる発展に向けて、現状の課題やそこで必要とされる教育のありかたについて意見交換をします。

【主 催】 津田塾大学創立 120 周年記念事業委員会

【共 催】 津田塾大学ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップ、津田塾大学女性研究者支援センター

## ビデオメッセージ



**Kimberly Wright Cassidy**

Bryn Mawr College 学長



**Emily Murase**

元 SF 女性地位推進局局長



*and*

**Kenji G. Taguma**

日米ウィークリー編集長

## 鼎 談

学 長

高橋 裕子



一般社団法人  
津田塾大学  
同窓会会長

飯野 正子



学芸学部  
英語英文学科教授

野口 啓子



## タイムテーブル

13 : 30 ~ 13 : 35 開会挨拶

13 : 35 ~ 14 : 05 ビデオメッセージ

14 : 05 ~ 14 : 20 休 憩

14 : 20 ~ 15 : 10 鼎 談

15 : 10 ~ 15 : 15 閉会挨拶

- ▶ 開会挨拶 小籠 亮之  
副学長（広報・学生担当）、  
創立 120 周年記念事業出版・イベント分科会長
- ▶ 閉会挨拶 早川 敦子  
副学長（教学・国際担当）

## Kimberly Wright Cassidy

Kimberly Wright Cassidy has served as President of Bryn Mawr College since 2014. A developmental psychologist, Cassidy served as the College's Provost from 2007-2013, and has been a member of the Psychology Department since 1993.

Cassidy has promoted academic innovation and has partnered with faculty to develop new multi- and interdisciplinary academic programs and to advance new approaches to teaching in a liberal arts context.

Cassidy led development of Excellence in Action, a strategic vision for Bryn Mawr's undergraduate college, as well as initiatives to enhance the College's distinctive, select graduate programs. She has also forged a broad institutional commitment to advancing diversity, inclusion, and equity.

Cassidy is a public advocate for gender equity, with a focus on equity issues in STEM disciplines and workplaces.

She earned her M.A. and Ph.D. from the University of Pennsylvania and bachelor's degree with distinction in psychology from Swarthmore College.

## Emily Murase

Dr. Emily Murase is a third-generation Japanese American whose career has been dedicated to gender equity, ending violence against women, and international relations. For the past 15 years, Dr. Murase served as Director of the San Francisco Department on the Status of Women for the City and County of San Francisco where her pioneering work earned recognition from the UN Institute for Research and Training, the Italian Regional Government of Lombardy, and the U.S. Federal Bureau of Investigations. Active in her children's education, Dr. Murase became, in 2010, the first Japanese American to be elected to the San Francisco Board of Education in its 160+ year old history. She served two terms, including as President, championing world languages, anti-bullying, and equity.

In 2013, she was selected as a member of the U.S.-Japan Council Japanese American Leadership Delegation and met with Prime Minister Shinzo Abe, Foreign Minister Fumio Kishida, and other political and business leaders. In 2015, Dr. Murase hosted First Lady Akie Abe for her historic visit to San Francisco. As a Board Member of the San Francisco-Osaka Sister City Association (2005-present), Dr. Murase chaired the Student Ambassador Program (2010-2012). Appointed a Visiting Lecturer of Osaka University, she delivered an annual lecture on gender equity to undergraduates (2015-2020). For over a decade, she has led a San Francisco delegation to the UN Commission on the Status of Women meetings and presented regularly to numerous international delegations hosted by the U.S. Department of State on strategies for advancing gender equity (2005-2020). Always aspiring to be a "Bridge Across the Pacific," Dr. Murase received a commendation from the Japanese Foreign Minister.

Dr. Murase holds a BA from Bryn Mawr College, a master's in International Pacific Affairs from UC San Diego, and a PhD in communication from Stanford. She resides with her husband Neal Taniguchi in San Francisco where they raised their two now adult daughters Junko and Izumi.

## Kenji G. Taguma

Kenji G. Taguma, a native of Sacramento, California, is the Founding President of the Nichi Bei Foundation, an educational and charitable nonprofit organization which launched the Nichi Bei Weekly, first nonprofit ethnic community newspaper of its kind in the country. Taguma also serves as Editor-in-Chief of the Nichi Bei Weekly, the third incarnation of a legacy of community leadership through media that began with the Nichi Bei Shimbun published from 1899-1942 by Kyutaro Abiko and Yona (Tsuda) Abiko — the younger sister of Tsuda University Founder Umeko Tsuda — and the Nichi Bei Times, founded in 1946 to reconnect Japanese Americans after their wartime incarceration in American concentration camps. Leaders of the postwar Nichi Bei Times included Yasuo Abiko, the only child of Kyutaro and Yona Abiko and Umeko Tsuda's nephew.

An accomplished journalist, Taguma won the 2005 Grand Prize Award from the Overseas Japanese Press Association in Tokyo for his bilingual series on whether or not Japanese Americans had a responsibility to bridge U.S.-Japan relations. In 2013, he was awarded a Consul General Award from Consul General of Japan in San Francisco Hiroshi Inomata, for his "distinguished achievements in contributing to mutual understanding and friendship between Japan and California," the youngest to ever earn the award in the region.

## 高橋 裕子

津田塾大学英文学科学卒業。筑波大学大学院(国際学修士)、アメリカ・カンザス大学大学院にてM.A.及びPh.D.を取得。桜美林大学専任講師・同助教授を経て、1997年から津田塾大学専任教員。2016年より同大学長。専門はアメリカ社会史(家族・女性・教育)、ジェンダー論。著書に『津田梅子の社会史』(玉川大学出版部、2002年、アメリカ学会清水博賞)等。International Federation for Research in Women's History 会長、ジェンダー史学会副代表理事、日本学術会議会員、日本私立大学連盟常務理事、国立大学法人東京工業大学経営協議会委員、内閣府男女共同参画局男女共同参画推進連携会議議員、外務省日米教育委員会日本側委員、公益財団法人大学基準協会理事、IDE 大学協会理事等。

## 飯野 正子

津田塾大学学芸学部英文学科学卒業後、フルブライト奨学生としてシラキュース大学大学院歴史学専攻修士課程修了。津田塾大学学芸学部英文学科学専任講師・助教授・教授等を経て、学長(2004年～2012年)および理事長(2012年～2013年)を務めた。この間プリンマー大学招聘教授として滞在。2013年より名誉教授。

著書に『日系カナダ人の歴史』(東京大学出版会、1997年)(カナダ首相出版賞受賞)、『もう一つの日米関係史—紛争と協調のなかの日系アメリカ人』(有斐閣、2000年)等。一般社団法人津田塾大学同窓会会長および学校法人津田塾大学理事。

## 野口 啓子

津田塾大学大学院文学研究科博士課程満期退学。愛知県立大学外国語学部助手・専任講師・助教授を経て、現在、津田塾大学学芸学部英語英文学科学教授。この間プリンマー大学へ留学し(1982-1983)、アマーフト大学(1987-1988)、ワシントン大学(2001-2002)、カリフォルニア大学バークレイ校(2010)にて客員研究員として海外研修を行う。2017年4月から2020年3月まで津田塾大学副学長(広報・学生担当)を務めた。専門は、19世紀のアメリカ文学・文化。

著書に、『後ろから読むエドガー・アラン・ポー 反動とカラクリの文学』(彩流社、2007年)等。日本ポー学会副会長。



津田塾大学津田梅子資料室  
2021年度企画展

# 津田梅子

本とひと

2021. 10/10 [Sun] → 2022. 9/30 [Fri]

日時予約制

写真：友人の部屋で本を読む津田梅子  
アリンマー大学図書館蔵

津田梅子資料室展示スペース  
(津田塾大学図書館2階)

(10月10日のみ、「津田梅子の着物」を展示します)